複数形を‘dwarves’と綴っていたのだが(正しくは‘dwarfs’)、ある時このことを編集者に指摘された。この時編集者はこの英語学の大家の誤りを発見して鬼の首でも取ったかのような気分になり、調子に乗って「嫌だなあ先生、OED(Oxford English Dictionary)くらい引いて下さいよ」とか何とか言ったらしいが、トールキン先生は憮然として「OEDを書いたのは俺だ」と切り返したという。確かにトールキンはOEDの編纂者に名を連ねている。そして『ホビットの冒険』や『指輪物語』があまりにも広く読まれたために、今では多くの辞書が‘dwarf’の複数形として‘dwarfs’と‘dwarves’の両方を認めている。なお、関係ないが日本の皇太子が留学していたのもこのマートン・コレッジである。

オクスフォードの街を遠くから眺めるとコレッジや教会の尖塔(spires)が林立しているのが見える。黄昏時のこの眺めを「ドリーミング・スパイアーズ」と謳ったのは詩人・批評家のマシュー・アーノルド(1822〜88)である。アーノルドはベイリオル・コレッジ出身であり、在学中に学生が書いた優れた詩に対して授与される「ニューディゲイト賞」を受賞している。卒業後はオリエル・コレッジの特別研究員として、教育学と詩学の分野で活躍した。

と、このようにオクスフォード大学は優れた文学者を大勢育てているのである。しかしながら、ジョン・ミルトン(1608〜74)、トマス・グレイ(1716〜71)、S. T. コウルリッジ(1772〜1834)、そしてウィリアム・ワーズワース(1770〜1850)など、英文学史上に燦然と輝く大物が皆ケインブリッジ大学出身なのは何故だろう。

《質問》という名の教師の宿題

法学部
鄭　高咏

教室でよく質問を受けることがある。その場で答えられない場合は、私の宿題となるのだが、この場を借りて、その中の一部を紹介したい。

質問1：“买东西”の由来は?

中国語で「買い物」は“买东西”であり、決して“买南北”とはいわない。この“买东西”という言葉の語源をみてみよう。

一説によると宋代の著名な哲学者、朱熹の逸話に由来するという。ある日彼は街でかごを手にした親友の盛温如と行き会い、「どこへ行くのだね。」と尋ねた。「“去买东西”(買い物に行く)」との返事に、「“买南北”と言ってもよいではないか。」と朱熹が疑問を発すると、盛温如は答えていわく、「相生相克の理論で森羅万象を説く五行説に基づいているのだ。五行とは金・木・水・火・土であり、これに東・西・南・北・中の方角を当てはめると、東は木、西は金となり、金や木といったものはかごに入る。しかし、南は火、北は水となり、火も水もかごには入れられない。だから“买南北”とは言わないのだ。」

また清代の龔煒という学者によれば、この語の由来は後漢にまでさかのぼる。当時は商人が東の都洛陽と西の都長安に集中しており、この東西の都へ買い物に行くことを“买东”、“买西”といった。そして時がたつにつれ、“东西”は「品物」の代名詞となり、“买东西”という言い方が生まれたのである。

質問2：医者を“大夫”、“郎中”というのはなぜ?

中国の北の方では医者のことを“大夫”といい、南の方、特に農村では“郎中”というが、この呼

称は1000年以上前の、唐代に続く五代の時代（907～960年）にまでさかのぼる。

当時、政治は腐敗し、戦乱が相次いでいたが、支配階級の人間たちは贅沢三昧、官職を売り飛ばしては私腹を肥やしていたため、巷には官職の肩書きがあふれた。そして人々の間では官職名で呼び合うことが一般化し、読書人を“相公”、手に職を持つ者を“待诏”、お茶売りを“茶博士”、質屋の店主を“朝奉”、金持ちを“员外”、“宜敬”、“奉斋”などと呼ぶようになった。世のあらゆる職業に官職名が付けられたといっても過言ではない。

こうした中、皇帝から貧民まで、誰もが世話になる医者は非常に尊敬されていたため、高い官位の“大夫”、“郎中”と呼ばれるようになった。ただし、医者を“大夫”と呼ぶようになったのは、正しくは宋代（960～1279年）からである。

宋の時代、中国の医療制度と医学管理は大きく発展し、医療行政を担当する官職が数多くあった。翰林（注：唐代以後に設けられた官庁）の医院に所属する医官は７階級に分けられ、官職も“和安大夫”、“成和大夫”、“成全大夫”といった具合に22種類も設けられていた。かくして“大夫”は医者の正式名称となり、今日に至っているのである。

質問３：「中国」と「中華」のいわれは？

「中国」という語は周代の文献が初見であるが、「中」の字はこれ以前の甲骨文にも既に見られる。その字形は旗の形に似ているのだが、商王は旗の下で会議を開き、人々は旗を囲んで王命を承っていたことから、「中央」の意味が派生した。『詩経』や『礼記』には「中国」という語が記載されているが、当時この語には二つの意味があった。一つは「都」、もう一つは華夏族（漢民族）の居住地域とその国家である。このころ華夏族は黄河の中流域一帯を版図とし、現在の陝西や河南に都を置くのが一般的であり、“四夷”（羌・戎・狄・蛮などの民族）の中央、あるいは“九州”（冀・兖・青・幽・并・揚・荊・豫・雍の九つの州）の中央に位置していたため「中国」と称した。秦・漢以後、「中国」の語は民族や中原地域の枠を超えて政権の別称となり、19世紀中葉以後は中国全土を指すようになった。この通り、中国が自ら「全世界の中心の王国」をもって任じているという見解は正確さを欠くものである。

中華の「華」は、漢民族の祖先が「華夏」と自称したことに由来し、「華」は「鮮やか」、「夏」は「大きい」という意味である。孔穎達が記した『尚書』の注釈には“中国有礼仪之大故称夏、有服装之美谓之华”（中国はその礼節の偉大さゆえに夏と称し、その衣装の麗しさゆえに華という）とある。実際には、漢民族と羌・夷・戎・狄・苗といった各民族が融合して形成されたのが初期の華夏族であったが、この呼称は秦代には秦人、漢代には漢人、さらに唐代には唐人と、時代とともに変化した。近代に生まれた「中華民族」という概念は中国の諸民族の総称である。